

「キー」と「奇異」は 同じ音節か？ 違う音節か？

木下泰臣*

目 次

1. はじめに
 2. 音節の正体
 3. 実験
 - 3-1. 実験の概要
 - 3-2. 実験音声の収録
 - 3-3. 音響分析
 - 3-4. 2拍語の分析
 - 3-4-1. 2拍語の考察
 - 3-5. 3拍語の分析
 - 3-5-1. 3拍語の考察
 4. まとめと今後の課題
-

1 はじめに

日本語を発するということは音の高さやリズムや強さといった調子を発するということである。どんな語であっても、それを声に出して言おうとすると必ず音の高低を伴って発話される。発話された音声には物理的な切れ目はポーズしかない。拍や音節は一続きの音のかたまりの中に日本語母語話者が主観的に切れ目がある、と分析する単位である。日本語らしい調子を習得するためには日本語の音韻感覚、つまり拍感覚、音節感覚を習得しなければならない。本研究では音節の定義を確かなものにし、その定義を音声学的に検証する

* 祥明大学校 日本語文学科 教授 日本語学

ことを目的とする。

2 音節の正体

- (1) a.紫(むらさき) (4拍4音節)
 b.国外(こくがい) (4拍3音節)
 c.札幌(さっぽろ) (4拍3音節)
 d.東京(とうきょう) (4拍2音節)
 e.観光(かんこう) (4拍2音節)

(1)を4単位と分析する記述は日本語の分析としてきわめて一般的なものである。〈もじ〉を1単位とする数え方で、日本語の記述にこの分析が不可欠であることは言うまでもない。本研究ではこの単位を拍(mora)と呼ぶ。

一方、(1a)を4単位、(1b,c)の語を3単位、(1d,e)の語を2単位とする分析もある。(1b~e)の語に含まれる特殊拍(二重母音、促音、長音、撥音の4要素)はアクセント核を担えない、単独で語頭に立たないなど、自立拍ほど音韻的側面においては自立性が高くないことから、直前の自立拍と合わせて1単位と数える分析である。この分析は日本語のアクセントの担い手としての機能や、形態規則の説明に重要な役割を果たしている。本研究ではこの単位を音節(syllable)と呼ぶ。現在のところ、この定義におおよその理解が得られているものとする。

シラブルという単位は英語母語話者にとって直感的に理解できる単位であるという。単語をより小さな単位に切って発音しなければならないとき、彼らは通常、シラブル単位に区切るという方策をとる。Japanという語であれば、ja·pan、Chinaであればchi naと区切って発音する[6]。シラブルは音節と訳され、その定義は「母音を中心とする音のまとまり」と言われている。一般的にこれを〈聞こえ〉という概念で表現する。この〈聞こえ〉は音声学的な切り出し方のため、発話の仕方によって音節数が異なるという事態が生まれる。例えば、明治時代には「ニッポン」という語を通例は2音節に発話し、2単位と分析していた。しかし、日本語母語話者は「ニッポン」という語をゆっくり丁寧に言う場合には「ニッポン」とも区切って4単位に発音することもできる。このように一部の語では母語話者であってもその音節数に完全な一致をみない。「ニッポン」を4音節とする考えに対し、日本語の韻律的単位は〈もじ〉であり「ニッポン」の音節は4単位に分けるべきだという考えが出され、広く受け入れられた。以後、シラブルの訳語としての音節に、2単位に分ける一派を服部式、4単位に分ける一派を有坂式と、二通りの数え方が生まれた。こうして、音節という術語に

対して、〈聞こえ〉の単位として音声学的音節、〈韻律的単位〉として音韻論的音節という使い分けが始まった。

音韻論的音節はリズムの単位として音韻体系にあてはまる。有坂式音韻論的音節と服部式モーラは「ニッポン」を4単位に分析する点で共通する。ところが有坂によると、どの言語にも音韻論的音節、音声学的音節があるという。一方、服部のモーラは全ての言語に存在するものでないという。事態はなかなかこみいっている。

有坂式では「ニッポン」は音声学的には2音節の言葉であるが、ときには4音節に発音されることもある。この点は服部式も同様である。違いがあるのは音韻論的音節の方である。

服部式では音節とは別にモーラという用語を用いる。「ニッポン」は音節で見ると音声学的にも音韻論的にも2音節であるが、モーラとしては4モーラと数えることができる（表1参照）。有坂の音韻論的音節と服部のモーラはやかましくいうと同じではないが、現実問題として日本語を分析した結果は常に一致する。

	ニ・ッ・ポ・ン	ニッ・ポン
有坂式	音韻論的音節 音声学的音節（丁寧な発音）	音声学的音節 （不明瞭な発音）
服部式	モーラ	音韻論的音節 音声学的音節

表 1： 韻律的単位概観

ところで、このモーラという概念を音韻論上の術語として持ち込んだのはトルベツコイである。トルベツコイは世界の言語を二つに分けて、ある言語はシラブルに分析でき韻律的単位がシラブルと一致する。他の言語はシラブルに分析され、さらにその音節がモーラというもうひとつ下の単位に分析でき韻律的単位はモーラに一致するという考えを発表している。このモーラにわかれる言語の一つに日本語を紹介している。

有坂式音韻論的音節と服部式モーラの分析は日本語の分析では常に一致するので、金田一(1967a)は有坂式音韻論的音節と服部式モーラをまとめて拍と呼び、音韻の単位として確立させた。

拍：基本的にくもじを1単位とし、拗音はくもじ二つで1単位とする。特殊拍は1単位と数える。

以後、モーラの訳語に拍が用いられるようになり、「ニッポン」を「ニ・ッ・ポ・ン」と4単位に数える分析を拍またはモーラと呼び、日本語の音韻の単位について音節と拍の二重構造による記述がなされるようになった。

杉藤は音韻の単位に二重構造は複雑で、日本語をきれいな枠組みに入れようとするとは何かの矛盾をはらむと指摘し、日本語の音韻の単位は拍であることを自然な発話による実験資料を用いてあきらかにした。杉藤は英語の音節の区切りでは「ストライク」の「ライ」は1単位に数えるが、日本人が発話した外来語としての「ストライク」では[a]と[i]に明確な差があるため母音連続とみなし、2単位に数えている。このように、英語の音節の区切りと日本語の音節の区切りは一致するとは限らない。

(2)で示す類の語は<聞こえ>を基準にして音節として区切ると1単位として扱われることは想像に難くない。例えば、「子に」は確かに2単位である。それは間違いない。しかし、どうも(2a)「子を」を1単位だとは考えられない。「コ」と「ニ」、「コ」と「オ」はそれぞれ別の語で、間に意義の切れ目を感じる。どうやら母音が並んだら無条件に長音になるというわけではないようである。この切れ目は助詞の前とは限らない。

(2) a.子(こ)を

b.奇異(きい)

c.好悪(こうお)

d.棋院(きいん)

仮に「子を」を1単位とする分析では「子を追ってきた」をどう分析するだろう。「追って」の「て」は無声化して母音性がなくなることもある。そうすると「コオotte」に音声学的な分析では母音は[o]しか存在しない。1単位と分析するのだろうか。「て」が無声化しなくても「コオott」を1単位とは考えられない。やはり、「子を」の「コオ」は2単位と考えた方がよいようである。しかし、それを音声学的な側面から説明する研究は管見の及ぶ限りでは見ない。

これまで、音節の定義を<聞こえ度>や<呼気量>、丁寧な発話でどうなるか、など音声学的な側面から定義しようとしてきた(服部1955、有坂1957、金田一1967a、杉藤1989)。その結果、同じ語であっても話者によって音節数が異なるなど、明確な結論が得られていない。音韻体系を構築する単位である音節の定義があいまいであっては不都合なのはやうまでもないだろう。

本研究では音節は音韻体系からの要求によってのみ成立するべきだと考える。音節も拍と同様に基本的には<もじ>を1単位とし、特殊拍は直前の拍と合わせて1単位とする。つまり、拍と音節の差異は特殊拍を1単位と認めるか、認めないか、それだけである。言語学的な見地から言うと、シラブルの訳が音節なので、日本語だけの定義は認められず、

他言語を観察した上で定義しなければならない。しかし、音節がその言語内でどのように振舞うかは音韻論の領域である。日本語に限って話をする場合には日本語の音韻体系からの要求によって定義されている方が望ましい。他言語においてもその言語の音韻体系の要求に従って独自の定義を持つべきであろう。本研究では(2)を(2a,b)は2拍2音節、(2c,d)は3拍2音節と記述する立場をとる。

- (3) a.里親 (サトオヤ)
- b.砂糖屋 (サトーヤ)

金田一(1967b)では(3)を音韻的に異なる語だと結論付けている。(3a)里親は「サト」と「オヤ」の間に意義の切れ目があり、(3b)砂糖屋は「トー」に意義の切れ目がない。そのため里親の「トオ」と砂糖屋の「トー」は別の音韻であり、「トー」の第二要素を長音として認めるべきだという。

なお、金田一の研究では里親も砂糖屋も4音節と分析しているが、音節の定義が本研究とは異なる。彼は丁寧に区切って発話した分析の記述に音節を用いている。砂糖屋を「サ・ト・ウ・ヤ」と区切って、「糖」を2単位とする分析は本研究では拍が相当する。金田一の分析を本研究の拍と音節で捉えなおすと、里親は4拍4音節、砂糖屋は4拍3音節ということになる。

これまで音節の定義に関して音韻論の見地からはあまり注目されていないため、連続した母音でも意義の切れ目を越えて一つの音節になることはできないとする分析について十分に検証されていない。しかし、この分析は日本語の音韻体系を見る限りではおそらく正しい。それは他の例を分析してみると明らかになる。

- (4) a.二月生まれ (ニガツウマレ)
- b.義男おじさん (ヨシオオジサン)

(4)は複合語で、(4a)は生まれの「ウ」、(4b)おじさんの「オ」にアクセント核がある。仮に意義の切れ目を越えて一音節を形成するという分析では、二月生まれの「ウ」、義男おじさんの「オ」はそれぞれ特殊拍(長音)として扱われるが、その分析では特殊拍はアクセント核を担うことができないという東京語のアクセント規則に抵触する。二月の「ツ」と生まれの「ウ」は別の音節であると分析しなければならない。換言すると、複合語の後部要素の第一拍目は特殊拍にならないと言える。

音節：基本的に<もじ>を1単位とする。拗音は<もじ>二つで1単位とする。特殊拍は直前の音節と合わせて1単位と数える。複合語後部要素の第一拍目は特殊拍にはならない。

3 実験

3.1 実験の概要

これまで本研究では、音節は意義の切れ目を越えて形成されないという命題を音韻論的な側面から論じてきた。ここからは日本語母語話者の発話を音響分析することで音節境界を意識した発話が実際の音声にどのような特徴として現れるか、音声的側面から考察する。

このような研究ではデータの収集に関して二つの方法がある。第一の方法は自然な談話を録音して分析する方法である。それに近い方法で採取された音声コーパスや映画・ドラマなどもこれに含まれる。第二の方法は研究者が資料を準備し、発話者にそれを発話させる方法である。

これら二つの方法にはそれぞれ利点がある。第一の方法の利点は発話の自然性が高いという点である。また、さまざまな要因が混入しうるため、研究者の想定を超えた現象に遭遇する可能性がある。第二の方法の利点は、条件を統制できる点である。

本研究では第二の方法を用いる。本研究においては音声の詳細な特徴を分析するため、音声的な条件の統制が必要となるからである。ここで言う条件とは音声的条件（どのような子音と母音を用いるか、文の長さはどのくらいか、など）、パラ言語的条件（どのような感情をもって発話しているか、など）、文法的条件（どのような統語構造や意味構造をもちいるか）、話者に関する条件（性別、年齢、母方言、など）である。

さて、音声条件の統制とはどのようにすればいいだろうか。一つ有効な方法は、ミニマルペアを用いることである。例えば、「箸」と「橋」は語アクセントのみを異にしたミニマルペアである。このようなミニマルペアを分析することによって、語音配列を統制した上で語アクセントのみを分析することが可能になる。ただし、これは語アクセントを分析する手法である。本研究の目的は音節境界の異同の調査である。では、どうすれば音節境界の異同が分析できるミニマルペアを作ることができるだろうか。

本研究では音節境界の異同に関して、二つの方法でミニマルペアを作り、分析を行なう。一つは音節境界を異にする頭高型アクセントの2拍語を用いた入れ替え文を用いる方法である。アクセント型を統制することにより、語アクセントの影響を受けない分析が可能になる。もう一つは音節境界を異にする頭高型アクセントの3拍語を用いた入れ替え文を用いる方法である。2拍語で得られた特徴が3拍語でも見られるなら、それは拍数に限らず現れる特徴だと考えられる。つまり、頭高型アクセントの発話で音節境界を意識した際に現れる音声的特徴と見なすことができる。

3.2 実験音声の収録

実験音声には、音声的なさまざまな要因を統制するため、頭高型アクセントで母音を[i]に統一した。2拍語/bii/,/kii/,/sii/,/jii/、3拍語/giin/,/kiin/,/tiiku/,/jiin/の計8対を設定した。2拍語と3拍語をそれぞれの水準で比較することにより、子音の影響を見ることが出来る。また、2拍語と3拍語の分析の結果を比較することにより、頭高型アクセントの音節境界について広い見地からの検討が可能になる。

実際の録音では、長母音を(a)、母音連続を(b)として「Xではなくて、Yです。」の文型で録音した。発話者には「(a)ではなくて、(b)です。」、「(b)ではなくて、(a)です」の例文を呈示し（表2参照）、子どもに読み聞かせるように読んでくださいと指示した。

例文：XではなくてYです	分析対象
Bではなくて、微意です。	B/bii/、微意/bi.i/
微意ではなくて、Bです。	微意/bi.i/、B/bii/
キーではなくて、奇異です。	キー/kii/、奇異/ki.i/
奇異ではなくて、キーです。	奇異/ki.i/、キー/kii/
椎ではなくて、恣意です。	椎/sii/、恣意/si.i/
恣意ではなくて、椎です。	恣意/si.i/、椎/sii/
Gではなくて、辞意です。	G/jii/、辞意/ji.i/
辞意ではなくて、Gです。	辞意/ji.i/、G/jii/
ギーンではなくて、議員です。	ギーン/giin/、議員/gi.in/
議員ではなくて、ギーンです。	議員/gi.in/、ギーン/giin/
キーンではなくて、棋院です。	キーン/kiin/、棋院/ki.in/
棋院ではなくて、キーンです。	棋院/ki.in/、キーン/kiin/
チークではなくて、知育です。	チーク/tiiku/、知育/ti.iku/
知育ではなくて、チークです。	知育/ti.iku/、チーク/tiiku/
ジーンではなくて、寺院です。	ジーン/jiin/、寺院/ji.in/
寺院ではなくて、ジーンです。	寺院/ji.in/、ジーン/jiin/

表 2：提示した例文と分析対象語一覧

東京方言話者の成人男性2名が発話した音声を録音し、音響分析を行った。録音は熊本県立大学外国語センターに設置されているスタジオにておこなった。音声は標準化周波数44.1kHz、16 bit量子化して、DAT（Sony社製TDC-D7）に保存した。十分に発話練習した後、録音を2回ずつ行ない、音声試料とした。発話者2×録音回数2×例文数16=64ファイルが得られた。音声分析にはPraat Var4.4を使用した。

発話者	性別	母方言	年代
H	男	東京	40代
Y	男	東京	40代

表 3：被験者

3.3 音響分析

分析画面を示す。図の上半分が音声波形である。上下の幅が音の強さを表し、横軸に時間をとる。振幅の粗密が音の高低を示している。下は音声波形を解析したスペクトログラム(0-8000Hz)とピッチ曲線(0-230Hz)とインテンシティー曲線(64-90dB)である。

音声波形を見ると、いずれも三つのかたまりに分かれている。最初のかたまりが「Xではな」、次のかたまりは「くて」、最後のかたまりは「Yです」の音声である。正確には「く」の母音が[k]と[t]に挟まれて無声化するため、ピッチが現れているかたまりの部分は「て」の母音である。音声波形上の最初のかたまりの急に上下に幅が広がる場所、スペクトログラム上の黒い帯の左端が母音のスタートである。音声波形上の最初のかたまりのクビレ、スペクトログラム上の白い筋が有声歯茎破裂音[d]の閉鎖部分で、必然的にインテンシティーが急下降する。最後のかたまりの急に上下に幅が広がる場所、スペクトログラム上の黒い帯の左端が母音のスタートである。かたまりのクビレは有声歯茎破裂音[d]である。母音のスタートから[d]までが、本研究の分析対象/ii/である。

図1~4を比べると、無声子音の/kiin/では母音の基本周波数(以下F0という)のピークが母音のスタートにあるのに対して、有声子音の/bii/はF0ピークが母音の中央付近にある。また、「Yです」部分の長母音はF0ピークが低く抑えられているのに対して、母音連続はF0ピークが高い。

分析画面上でF0ピーク値、母音の持続時間をそれぞれ測定した。結果をグラフで示す。最初に2拍語について分析をおこない、そこで得られた知見を参考にしつつ3拍語を分析する。

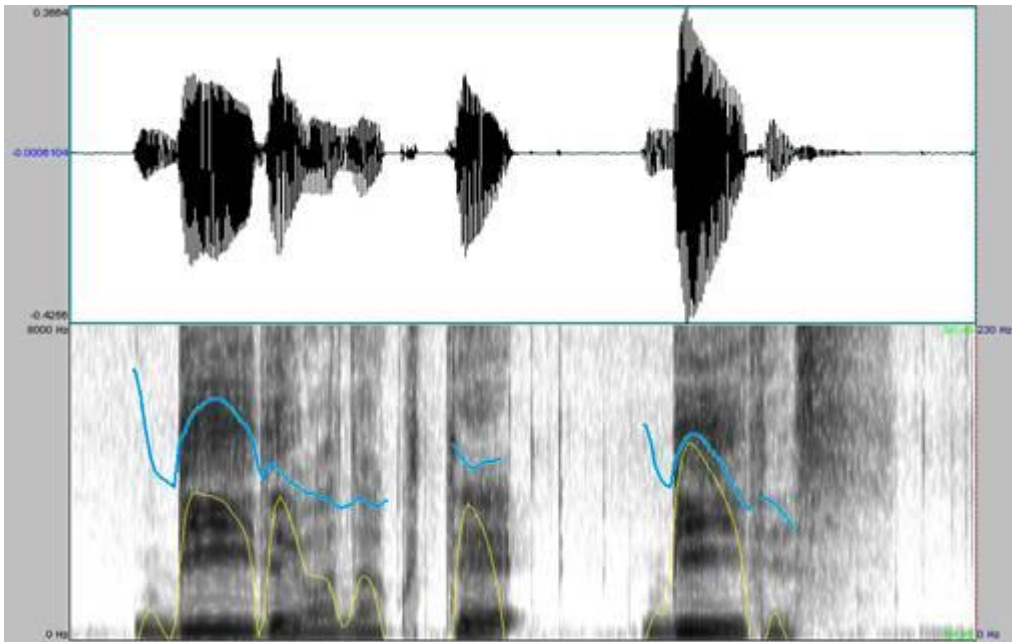


図 1 : Bではなくて、微意です

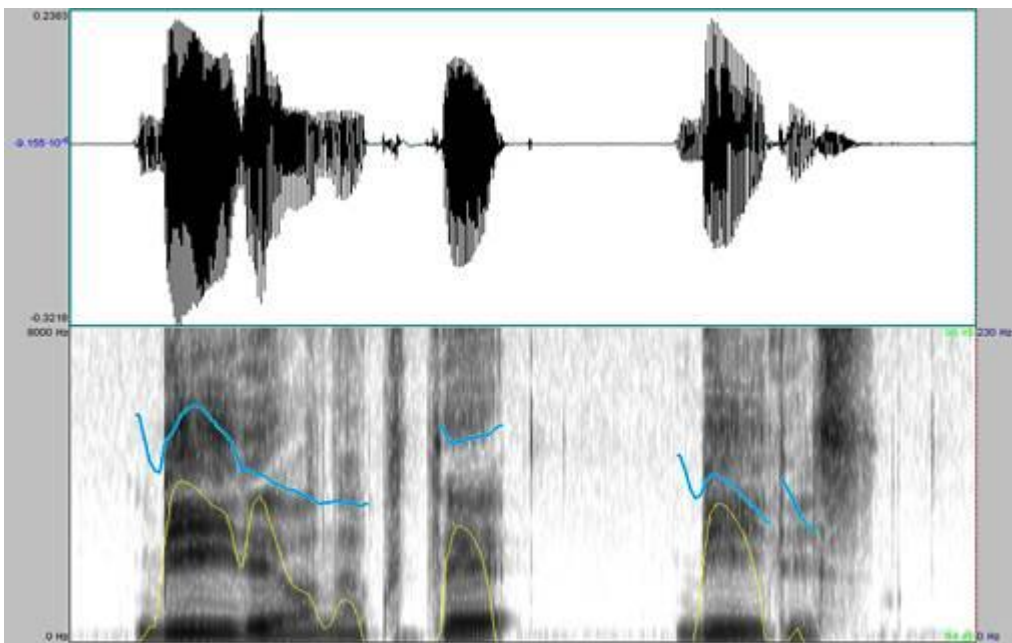


図 2 : 微意ではなくて、Bです

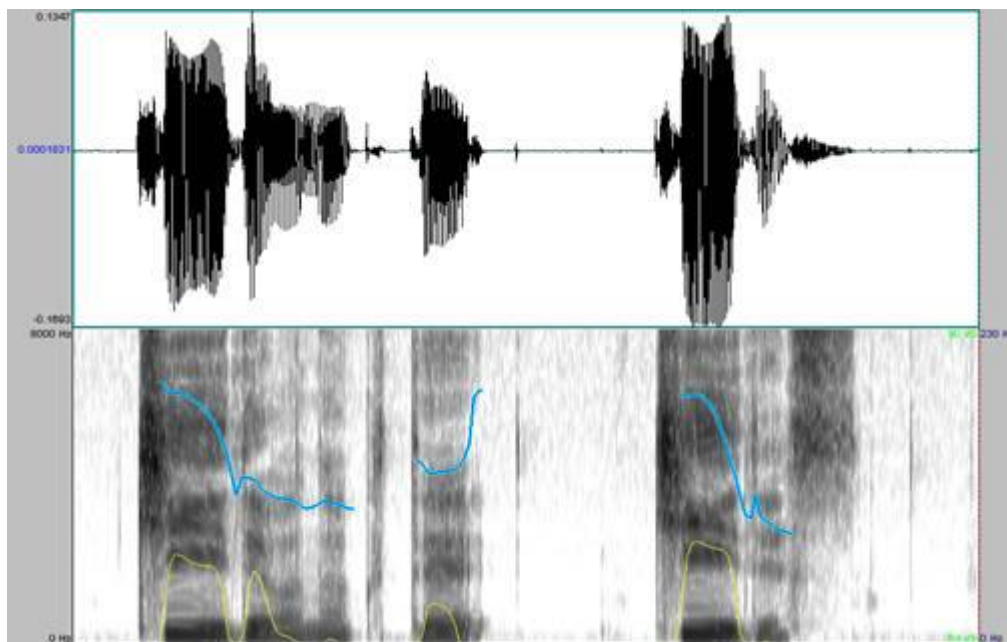


図 3：キーンではなくて、棋院です

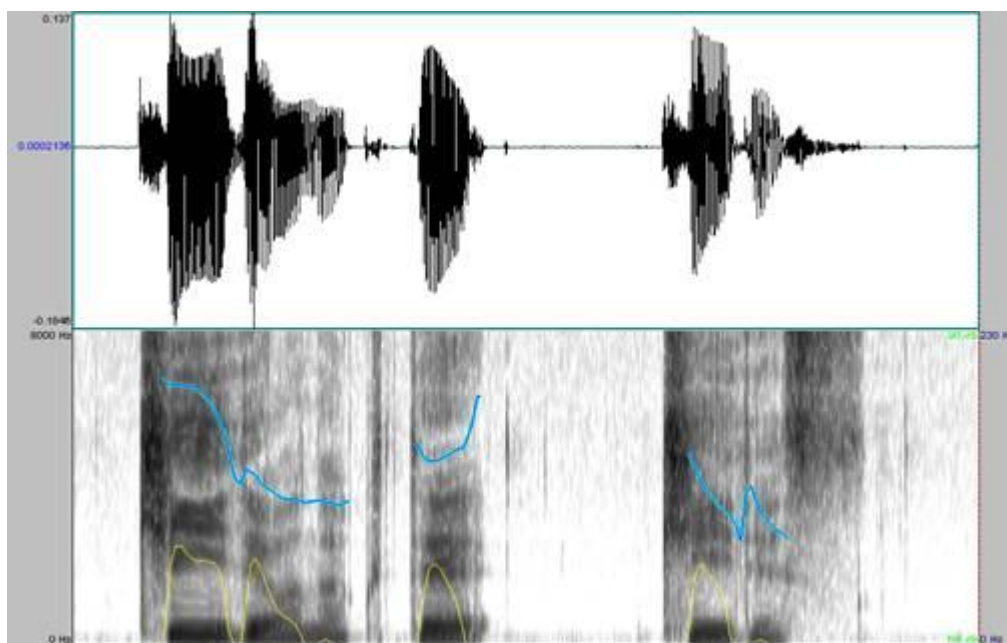


図 4：棋院ではなくて、キーンです

3.3.1 2拍語の分析

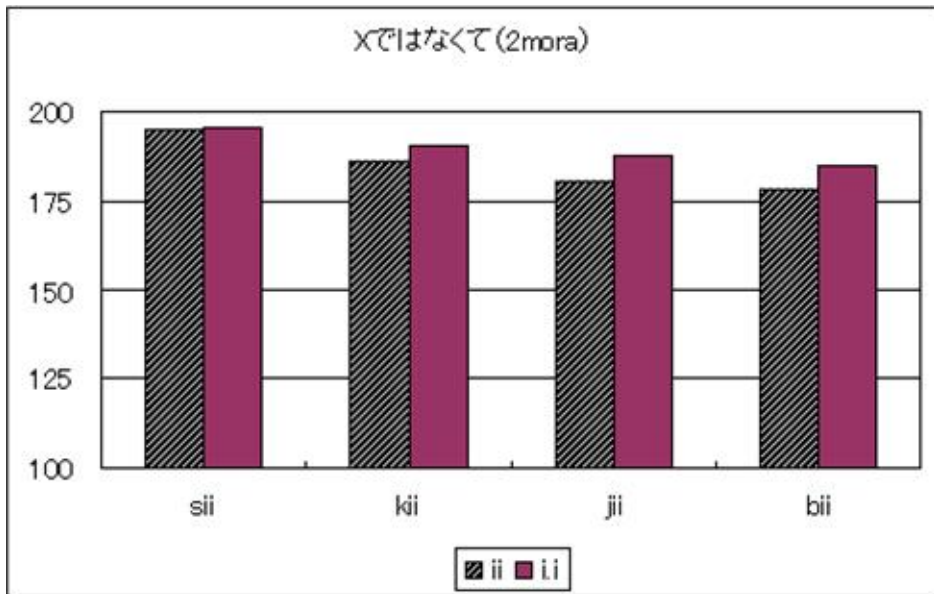


図 5：文頭2拍語のF0ピーク

無声子音の/kii/,/sii/が有声子音の/bii/,/jii/よりもF0ピークが高く発話されている。また、全ての対で母音連続[i.i]が長母音[i:]よりもF0ピークが高い。

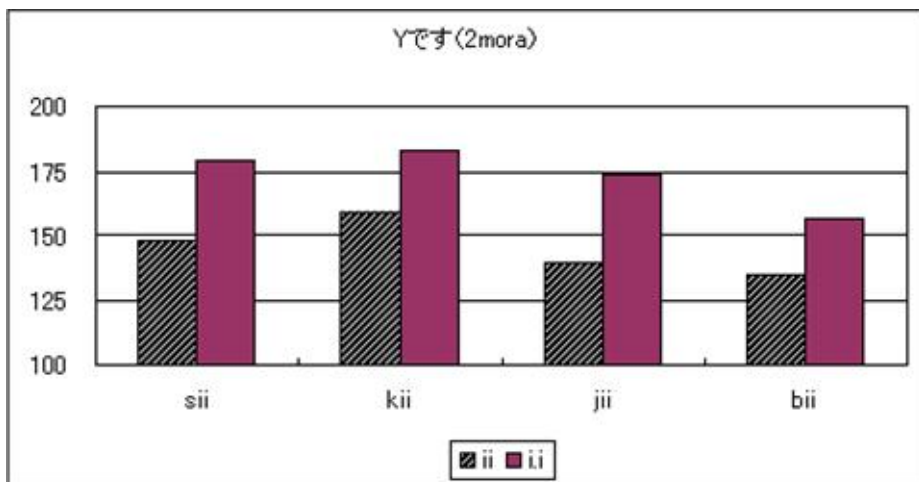


図 6：文中2拍語のF0ピーク

無声子音/kii/,/sii/の方が、有声子音/jii/,/bii/よりF0ピークが高く発話されている。また、母音連続は全ての対で長母音よりF0ピークが高い。

次に、母音の持続時間について見てみる。話速による影響をさけるため、本研究では母音直後の「Xではなくて」の「で」、「Yです」の「で」の母音の長さを1とし、それに対する長母音と母音連続の長さを求めた。

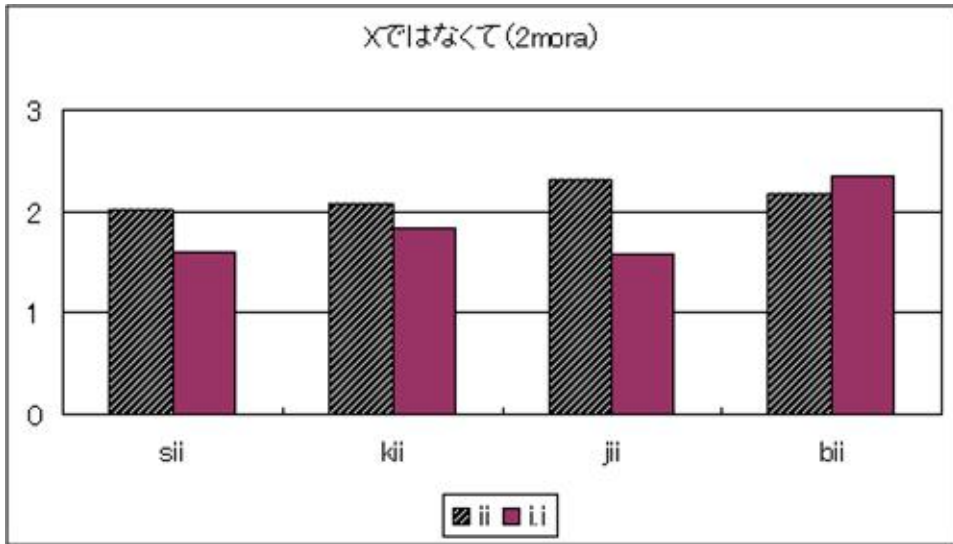


図 7：文頭2拍語の母音持続時間を直後の母音長で除したもの /sii/, /kii/, /jii/は長母音の方が長い、/bii/は母音連続の方が長い。

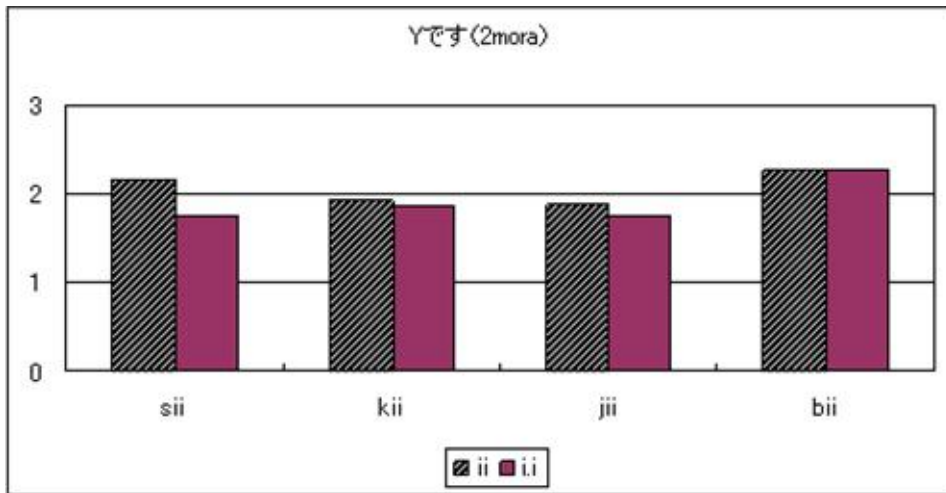


図 8：文中2拍語の母音持続時間を直後の母音長で除したもの 長母音、母音連続ともに/bii/は/sii/, /kii/, /jii/に比べて長い。また、全ての対で長母音

の方が母音連続よりわずかに長い。

3.3.2 2拍語についての考察

無声子音の音声は有声子音の音声に比べてF0のピークが高いことがわかった。有声子音の母音はスタートのF0が低く始まるのに対して、無声子音の母音はスタートのF0にピークが来ている。母音のスタートにおいて、F0が低く始まって高くなる、最初から高く始まるというのは子音が母音に与える影響だと考えられる。また、F0のピーク値に差が見られることも子音の影響と考えるのが妥当だろう。音節境界を意識することによって先行する子音によって程度の差はあるものの、F0ピークが長母音より高くなることがわかった。長母音と母音連続の差異は文頭「Xではなくて」では分かりにくい、文中「Yです」にあるときに顕在化する。

母音持続時間に関して、文頭の/bii/以外の対では程度の差はあるものの、長母音の方が母音連続より長い。F0ピークでは文頭より文中において、長母音と母音連続の差異が顕著になったが、母音持続時間の測定では逆に差が小さくなっている。文頭と文中の長母音、文頭と文中の母音連続を比べてみても、文頭/文中で明確な差は見られない。どうやら文中に入ったからといって時間長が伸びたり縮んだりするわけではないようだ。語音別に見るとわずかに伸縮はあるものの、誤差の範囲である。

3.3.3 3拍語の分析

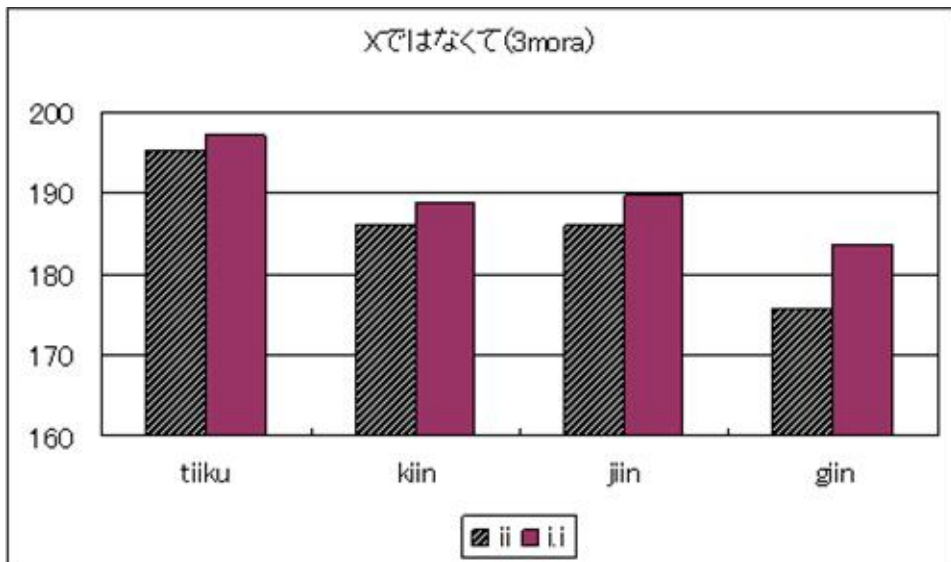


図 9：文頭3拍語のF0ピーク

/jiiin/と/kiin/ではわずかに/jiiin/の方が高いものの、全体的に見て無声子音の方が有

声子音よりF0ピークが高く発話されている。また、全ての対で母音連続の方が長母音よりF0ピークが高い。

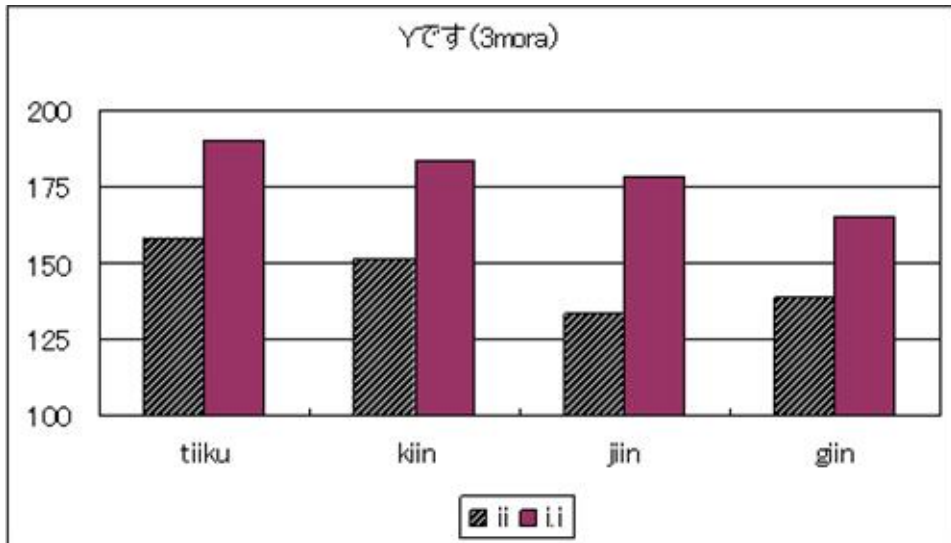


図 10：文中3拍語のF0ピーク

無声子音/tiiku/,/kiinn/が有声子音/jjin/,/giin/よりF0ピークが高く発話されている。また、母音連続は全ての対で長母音よりF0ピークが高い。

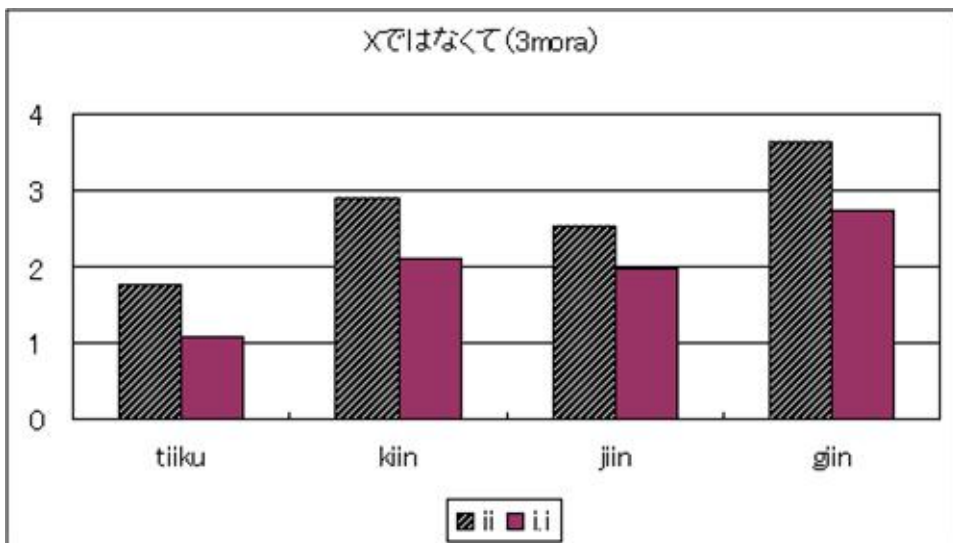


図 11：文頭3拍語の母音持続時間を直後の母音長で除したもの

/tiiku/が他の語に比べて短い。音節境界については、全ての対で長母音が母音連続より長い。

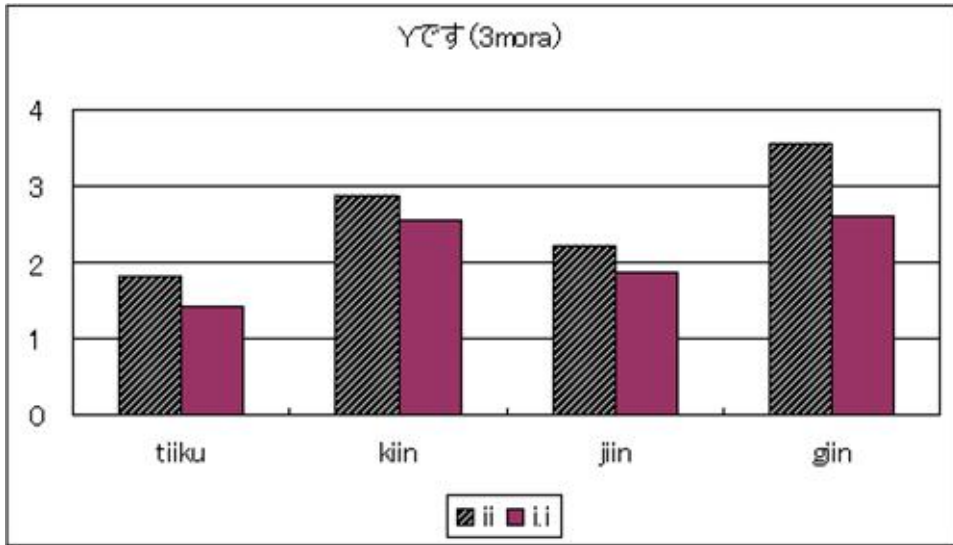


図 12：文中3拍語の母音持続時間を直後の母音長で除したもの
/tiiku/が他の語に比べて短い。音節境界については、全ての対で長母音が母音連続より長い。

3.3.4 3拍語についての考察

無声子音は有声子音よりもF0ピークが高い。また、母音連続の方が長母音よりF0ピークが高い。有声子音では母音のスタートのF0が低く始まるのに対して、無声子音では母音のスタートにF0ピークがきている。これらの特徴は2拍語で得られた特徴と同じものである。2拍語と3拍語のF0ピークの測定値を比較することにより、F0ピークは母音連続の方が長母音より高いという結果が得られた。音節境界を意識するとF0を高く発話しているらしい。

日本語のアクセントは拍が担う。長母音は2拍の長さでアクセントの高低を表せばいいが、母音連続では先行する拍と後続する拍の境界にアクセントの滝がくるため、1拍の長さでピッチの高低を表さなければならない。音節境界を意識した結果、高低変化をつけるために母音連続ではF0のピークが高くなったと考えられる。そしてその意識は文中に入っても保たれるためダウンステップが生じないのではなかろうか。

母音の持続時間について見てみると、まず目に付くのは/tiiku/の時間長が短いことだ。文頭/文中、長母音/母音連続の区別に関わらず、直後に来る母音の時間長の2倍に達していない。文頭母音連続「チイク」の母音持続時間は直後の母音とほとんど同じ長さで

ある。それでも「チイク」は「チク」には聞こえない。/jiin/も/kiin/や/giin/に比べると短い。子音の有声音、無声音の区別ではなく、/ti/,/ji/と/ki/,/gi/の調音法が異なることによる影響かもしれない。音節境界については3拍語の全ての対で長母音の方が母音連続より長い。

4 まとめと今後の課題

X部分で見られた音声特徴がY部分に共通しないのは、一つはイントネーションの関与が考えられる。発話一般に、時間と共にピッチレンジは狭められ、下降していく。このダウンステップという現象が、Y部分の長母音では生じている。一方、ダウンステップが生じない例として、文のフォーカスが当てられたときがある。音節の境界を意識した結果、Y部分の母音連続においてアクセントを強調するためにダウンステップが生じなかったと考えられる。

今回の実験から、一続きの母音に音節の境界を有する母音連続は、音声的にF0ピークを高くしてアクセントを強調させようとするばかりでなく、文中のY部分に入ってもダウンステップがおこなわれず、音韻論のレベルでも長母音とは異なる振る舞いが見られることが分かった。長母音と母音連続は異なる音韻観念をもって発話されていると考えてよいだろう。

本研究は目次番号2で日本語音韻の理論的な枠組みから音節の定義を見出し、目次番号3で音声学的見地から発話者の音韻観念を探ってみた。その結果、音韻体系に組み込まれている音節は、意義の切れ目を越えて形成されないことがわかった。また、ミニマルペアの発話を分析することによって、頭高型アクセントの母音連続と長母音は異なる音韻観念を持って発話されていることが確認された。

今回は基礎的な研究という位置づけから、さまざまな条件を統制して実験したため、今回の結果を全ての長母音と母音連続の関係に一般化することは適切ではない。今後は音節境界にアクセント核がない平板型や、助詞「へ」「を」が付いた形でも分析を進めたい。また、発話者が、長母音と母音連続を区別するために付加した音声的特徴が、知覚面においてどのように知覚されるか、これらの発話に対する母語話者の評価も行ない、産出と知覚の両面から検討していきたいと考えている。

【参考文献】

- [1] 有坂秀世(1957)「音韻制度の本質について」『国語音韻史の研究』 pp393-404
三省堂
- [2] 内田照久(1998)“日本語特殊拍の心理的な認知過程からとらえた音節と拍”『音声研究』 pp71-86
- [3] 川上夔(1982)“日本語のリズムの原理”『国学院雑誌』 pp48-55
- [4] 金田一春彦(1967a)「音節・モーラおよび拍」『国語音韻の研究』 pp58-77
- [5] 金田一春彦(1967b)「里親と砂糖屋」『国語音韻の研究』 pp133-153
- [6] 窪園晴夫ら(2002)『音節とモーラ』 研究社
- [7] 杉藤美代子(1989)「音節か拍か—長音・撥音・促音—」『講座日本語と日本と教育 2 日本語の音声と音韻(上)』 pp154-177 明治書院
- [8] 服部四郎(1955)「音韻論」
- [9] 馬場良二(2001)“発話を言語単位に切って知覚する際のピッチの働きについて”『日本音響学会聴覚研究会資料, vol.31, No.10, H-2001-90』
- [10] 長嶋善郎訳(1980)トルベツコイ『音韻論の原理』

要 旨

日本語を発するという事は音の高さや強さ、リズムといった調子を発するという事である。学習者は特殊拍の習得なしに日本語のリズムを身につけることはできない。リズムの単位が何であれ、音節という単位はなんらかの形で関わってくる。ところが、音節は<聞こえ>や<呼気量>といった音声的な側面から定義されている術語であるため、同じ語でも話者によって音節数が異なるという問題をはらんでいた。その一方で、音節は音韻体系に組み込まれ、アクセント規則など音韻の規則を説明する重要な単位として扱われている。

本論では、音節の定義を音韻論の側面から考察し、キーは1音節、奇異は2音節と分析する妥当性について論じてみた。また、東京方言話者2名に頭高型アクセントを有する2拍語と3拍語のミニマルペアを発話してもらい、それを音声学的に分析して母語話者の音韻観念を探ってみた。その結果、母音連続である「奇異」は文頭でF0が高くなるだけでなく、文中に入ってもアクセントが維持された。一方、長母音の「キー」は文中に入るとアクセントが弱化した。「奇異」と「キー」は異なる音韻観念を持って発話されており、別の語だと言える。

キーワード：拍、モーラ、音節、シラブル、長母音、母音連続、アクセント

투 고 : 2007. 5. 31
1차 심사 : 2007. 6. 9
2차 심사 : 2007. 6. 30

住 所 : (330-720) 충남 천안시 안서구 산 98-20 상명대학교 일본어문학과
電 話 : 041-550-5126
e-mail : kinoomi@yahoo.co.jp